イギリスにおける文学作品の上演並びに映画化について

田　淵　博　文

平成23年9月7日から9月14日にかけてイギリス（England と Wales）に滞在した。6泊8日の行程で、1日の車での移動距離が400から450キロという体力的にきつい旅行であった。訪れた場所は Emily Brontë の『嵐が丘』の舞台となった Haworth、Beatrix Potter や WilliamWordsworth が暮らしていた Lake District、シェイクスピア研究で有名な大学のある Birmingham、ビートルズや大聖堂で有名な Liverpool、中世の雰囲気を残し静かで落ち着いた美しい町並みが続く Chester、2008年に世界遺産に登録されて水道橋（Aquaduct）で有名になった Wales にある Llangollen、石灰岩（limestone）と蜂蜜で有名な Cotswolds 地方の3つの町（Castle Combe、Bibury、Bourton-on-the-Water）、Shakespeare の生誕地で世界的に有名な劇団 Royal Shakespeare Company（以下 RSC と表記する）のある Stratford-upon-Avon、かつて Jane Austen が短い期間だが住んでいた Roman Bath で有名な England 西部の町 Bath、Roald Dahl の故郷である Buckinghamshire の Great Missenden、それに Samuel Johnson をして、「ロンドンに飽きたものは人生に飽きたものである」と言わしめた London などであった。

3年前は England の北東に位置する Durham 大学に25日間滞在し、研究のかたわら Newcastle-upon-Tyne や Scotland の Edinburgh などに小旅行をした程度であったが、今回の旅行は実地研究が主であったので気分的に楽であり、久しぶりにイギリスを満喫できた。たとえ観光中心の旅行であっても、英語の教師にとってイギリスで見たり、聞いたりするものすべてが勉強であると私は思っている。イギリスの随筆や小説を読んでいて、様々な地名が出てくることがあるが、自分の足でその地を訪れているとその土地柄や風土について大体の想像がつき、大いに読みの理解の助けになる。それゆえ、英語教師が短期間であろうとも、イギリスやアメリカに滞在し、文学作品の背景となっているような場所などを実際に訪れることは、英語教師としての当然の義務であると私は考えている。

今回の旅行でイギリス文学作品の舞台となっている様々な場所を訪れたわけであるが、行く先々の information centre で brochure を手に入れ、どんな文学作品がイギリスで上演並びに映画化されているのかを調べてみた。経団連の肝煎りで、近年では多くの大学で TOEIC 教材が大学の1，2年生を対象にして使用されることが多くなった。英語教師として TOEIC の授業で、990点満点中、学生が何点取ったかという点数だけに一喜一憂するのではなく、学生が近い将来英字新聞を読めるようになるための指導を、現在おこなっているのだという信念をもって、授業に臨むことが大切である。英語の実用的な面だけを重視するので

はなく、教養を身につけることの大切さも疎かにしてはいけないと考えている。英語教師としての責務は、自らの専門性を深め、英語運用能力に磨きをかけることであるが、それ以上に英米文学の古典となっている作品をじっくり味読し、その作品の精髄を学生に分かりやすく伝授することではなかろうか。

平成23年8月頃から平成24年1月頃までにイギリスの各地域で上演並びに映画化された（現在されている・される予定になっている）文学作品について、以下の 1から 4の順序で、1. Pantomime、2. ロンドンの West End で上演されているもの　3. イギリスの各地域で上演されている文学作品　4. イギリスの各地域で映画化されている文学作品という見出しを立て簡単に説明を加えてみたい。

イギリスにおける上演並びに上映題目の一覧表

1. Pantomime

Sleeping Beauty（2011年12月3日から2012年1月7日）

Jack & The Beanstalk（2011年12月10日から12月30日）

Aladdin（2011年12月10日から12月31日）

Dick Whittington（2012年1月12日から1月15日）

2. ロンドンの West End で上演されているもの（最初に映画化されたものもある）

Billy Elliot、The Phantom of the Opera、We Will Rock You、Blood Brothers、Oliver、Mamma Mia、Les Miserables（英）

Chicago、Thriller、Wicked、Shrek、Legally Blond、Sister Act、Lion King（米）

3. イギリスの各地域で上演されている文学作品

William Shakespeare の作品　The Taming of the Shrew、Measure for Measure、As You Like It、A Midsummer Night's Dream、The Tempest、Macbeth

Harold Pinter の作品　The Homecoming

Arnold Wesker の作品　Roots

Alan Ayckbourn の作品　Taking Steps、Season's Greetings、Neighbourhood Watch

Willy Russell の作品　Blood Brothers

Dylan Thomas の作品　Under Milk Wood

Agatha Christie の作品　Murder on Air

Charles Dickens の作品　Oliver !

George Orwell の作品　Animal Farm

D.H. Lawrence の作品　The Rocking-Horse Winner

Thomas Hardy の作品　Three Tales

Geoffrey Chaucer の作品　The Canterbury Tales

Mike Leigh の作品　A New Play

Kenneth Grahame の作品　The Wind in the Willows

Jane Austen の作品　Pride and Prejudice、Sense and Sensibility

その他、Salome、Madam Butterfly、The Pitmen Painters、Calendar Girls、Snow White、Hansel and Gretel などの作品

4. イギリスの各地域で映画化されている文学作品

Arnold Wesker の作品　The Kitchen

Mary Norton の作品　Arrietty（The Borrowers）

Charlotte Brontë の作品　Jane Eyre

P.G. Wodehouse の作品　By Jeeves!

1. Pantomime

パントマイムは日本では「（身ぶりだけの）無言劇」と理解されるかもしれないが、『ロングマン英和辞典』に「（クリスマスのころに演じられる）おとぎ芝居（有名な話を音楽を交えて演じる）」と記されているように、イギリス人にとってはクリスマスと切っても切れない関係にあり、家族と一緒に子供たちが楽しむものである。Pantomime dame「パントマイムでのおばさん役（男が演じる）」という表現があるように、舞台のおばさん役が観客を笑い転げさせるほど楽しませてくれることもある。以下の 4作品がパントマイムとして紹介されていたので列記する。

Sleeping Beauty（2011年12月3日から2012年1月7日）

Jack & The Beanstalk（2011年12月10日から12月30日）

Aladdin（2011年12月10日から12月31日）

Dick Whittington（2012年1月12日から1月15日）

上記の 4作品は欧米の子供なら誰でも知っているものである。例えば、「眠れる森の美女」について「a riot of traditional panto ― fun、jokes、slapstick and songs」と記されているように「伝統的なパントマイムを面白くしたもので、笑いあり冗談ありドタバタがあり歌がある」演出になっていることがうかがえる。また「The Rock ‘n’ Roll Panto」とも書かれていて、にぎやかなロック調の演奏であることもわかる。観劇料金も10.5ポンドから16.5ポンドで、1ポンドを130円と換算して、約1400円から2100円ぐらいの安い料金に設定されている。「ジャックと豆の木」において、ジャックの母親役が pantomime dame で登場し、観客の笑いを勝ち取ることも容易に察しがつく。「アラディン」といえば「アラディンと魔法のランプ」であるが、「The Magical Pantomime Adventure! Dancing on Ice with Amazing 3D Special

Effects」と記されているように、「魔法のようなパントマイムの冒険！氷上で3D の特殊効果を使って臨場感あふれる踊り」を観客が堪能できる演出になっている。White Christmas といわれるように、白い雪や氷はクリスマスの季節になくてはならないものである。「ディック　ウィティントン」は、正式には「Whittington and his Cat」で、Joseph Jacobs の *English Fairy Tales* に掲載されていて、イギリスの子供にはなじみのある人物と猫である。[1] それゆえ、Roald Dahl が彼の著書 *Rhyme Stew* の「Dick Whittington and His Cat」の中で「世の中は決してそんなに甘いものではない」というメッセージを込めて、パロディー化した作品に仕上げているのも頷ける。[2] 観劇料も8ポンドから11ポンド（日本円で約1000円から1400円）である。パントマイムと聞けばクリスマスの頃に上演されるものであり、温かいぬくもりのある家族団らんの雰囲気を想起できるようになればしめたものである。

2. ロンドンの West End で上演されているもの（最初に映画化されたものもある）

ロンドンに在留している日本人向けの日本語新聞である『日英タイムズ』や色々なツアーを紹介している「ロンドン M（みゅう）」に掲載されていたミュージカルのみの一覧を以下のように列記してみる。

イギリスで制作されたミュージカル

Billy Elliot、Blood Brothers、Les Miserables、Mamma Mia、Oliver、The Phantom of the Opera、We Will Rock You

アメリカで制作されたミュージカル

Chicago、Legally Blond、Lion King、Shrek、Sister Act、Thriller、Wicked

上記のミュージカルについてすべてを劇場で観ているわけではないので、割愛していくつかの作品を取り上げて簡単に記すことにする。

「レ・ミゼラブル」と「オペラ座の怪人」は長期公演となっているミュージカル作品である。「ビリー・エリオット」は *The Little Dancer* という England 北東部の町ダラムを舞台にしたバレリーナを夢見る少年を描いた映画を舞台化したものである。「マンマ・ミーア」はエーゲ海に浮かぶ小島が舞台で、ここで小さなホテルを営むシングルマザーのドナと娘のソフィとの絆、驚きいっぱいの結婚式など、涙と笑いと愛にあふれた物語である。AƐBA のヒットナンバー 22曲が絶妙な構成で舞台を彩っている。「ウィー　ウィル　ロック　ユー」と「スリラー」も、おそらく The Queen と Michael Jackson のヒット曲がちりばめられている演出になっていると思われる。「ライオン・キング」と「シュレック」は主に子供向けの映画作品であった。「ウイキッド」は *The Wizard of Oz* の続編のような作品と言われている。舞台での上演は映画以上に、観客に直接的に訴えるので見ごたえも十分であると思われる。「オリバー」は Charles Dickens の *Oliver Twist*（孤児であるオリバーを主人公にした作品）を舞台化したものである。

上記のすでに映画化された作品と今回上演されている作品とを、実際に筋の展開や演出技法や観客へのメッセージの相違は何かという観点から、両者を比較してみることも演劇鑑賞のひとつの方法であると思われる。

3. イギリスの各地域で上演されている文学作品

イギリスの各地域でどのような文学作品が上演されているのかを以下に列記し、簡単に分かる範囲で説明を加えることにする。

さすがRSCを擁する演劇の国イギリスである。Shakespeareの作品が圧倒的に多い。「じゃじゃ馬馴らし」、「尺には尺を」、「お気に召すまま」、「真夏の夜の夢」、「テンペスト」、「マクベス」の6作品を列記したが、イギリス全土で年間をとおして考えると、おそらくShakespeare作品の上演題目は軽く20を超えるのではなかろうか。「真夏の夜の夢」はリーズ城の芝生の上（theatre on the lawn）で7月28日から7月30日の期間中に上演されている。観客はシャンパンなどを片手にくつろいだ雰囲気で劇を鑑賞し、夜の野外の風景を借景にした神秘的な上演を満喫したことだろう。広いスペースのあるRegent's Parkに観客席を設けた「真夏の夜の夢」の野外劇を数年前に見たことがある。役者の一人がアルコールの栓を抜こうとする仕草に合わせて、観客がタイミングよくシャンパンを抜いて笑いを誘っていたことを思い出す。私が驚いたのは「テンペスト」の上演を、『ジェリコ・ハウス』劇団が、ロンドンの教会内で演じると書かれていたことである。その教会の名前はSt Giles' Cripplegate Churchで9月21日から10月22日までの上演期間と書かれている。約400年前に初演された当時劇中で演奏された音楽を、今回初めて復活させる試みをしているそうである。中世の雰囲気いっぱいの興味深いステージになりそうだ。演劇が行われる場所は、必ずしも室内の劇場の舞台上だけでなく、時に野外の公園や城であったり薄暗い教会の内部で行われたりするのである。教会内の利点をどのように生かし、どのような演出を試み、どのように役者が教会内を縦横無尽に動き回るのだろうかと想像しただけでわくわくする。

今年の9月に「テンペスト」という題で映画化されたヘレン・ミレン主演の奇抜な「テンペスト」を見る機会があったが、主役を女性が演じていて少し違和感をもった。それゆえShakespeare作品を教室内で辞書を片手に精読し、最後まで読み終えたとしても、完全にその作品を理解したとは言えないのではなかろうか。イギリスに赴き、さまざまな舞台でどのようにShakespeare作品が上演され、観客がどのように反応しているのかを直接体験することも、作品を深く理解し鑑賞するという観点から、大切なことではなかろうか。

Geoffrey Chaucer（1340–1400）の『カンタベリー物語』が舞台で上演されることに驚いた。この作品は1387年から1400年にかけて執筆されたもので、Chaucerの最高傑作と言われているものである。今から600年ほども前の文学作品で、日本においては金子健二、吉田新吾、西脇順三郎、桝井迪夫などが翻訳を試みている。中でも桝井氏の訳は流麗で、声に出して読むと日本語の美しさを堪能できる。私は映画化されたものをオーストラリアのBrisbaneに

滞在していた時に、深夜のテレビ番組で見た。きわどい隠語（double entendre）の科白もたくさんあるので、舞台監督がどのように演出するのか楽しみでもある。

現代の劇作家の作品では Harold Pinter（1930-　）の「帰省」、Arnold Wesker（1932-　）の「根っこ」、Alan Ayckbourn（1939-　）の「Taking Steps」、「Season's Greetings」、「Neighbourhood Watch」などが上演されている。Pinter の劇は 'comedy of menace' と言われていて、しばしば Samuel Beckett や Franz Kafka のような不条理な作家と比較されている。十数年前にイギリスに滞在していた時に Pinter が 1960年に書いた *The Caretaker* が上演されていたと記憶している。「帰省」は1965年に初演、1971年に映画化された作品である。Stratford-upon-Avon の Swan Theatre で RSC が 7月28日から10月15日にかけて「帰省」を上演することになっている。

Ayckbourn の作品が 3本も上演されている理由を調べてみると、彼が舞台監督（theater director）として今年で 50年、劇作家（playwright）として 52年目に当たるからである。彼に敬意を払っていることがうかがえる。「Taking Steps」は笑劇（farce）、「Season's Greetings」は、Bill Kenwright が上演している classic comedy である。「Neighbourhood Watch」は彼の 75作目の新作（brand new play）であり、彼自らが舞台監督を務めている。

Wesker は、1968年に来日している。日本において、Wesker の作品で最も有名なものは「Chicken Soup with Barley」（「大麦入りのチキンスープ」）である。また、3幕 4場の「根っこ」は、10月27日から11月19日まで上演される。Pinter、Ayckbourn、Wesker は確かにイギリスを代表する現代劇作家と言えるかもしれないが、私の（保守的）好みからすれば Terrence Rattigan（1911-77）や Noël Coward（1899-1973）の作品が、今の時代でも West End の劇場で上演されることを切に願っている。両者ともイギリスの演劇界における多大な貢献に対して Sir の称号を贈られている。

一般に小説家として名を知られている人たちの作品について紹介してみたい。

Jane Austen（1775-1817）の「高慢と偏見」、「分別と多感」、Charles Dickens（1812-70）の「オリバー」、Thomas Hardy（1840-1928）の「3つの物語」、D. H. Lawrence（1885-1930）の「The Rocking-Horse Winner」、George Orwell（1903-1950）の「動物農場」、Kenneth Grahame（1859-1932）の「The Wind in the Willows」、それから劇作家としても有名な2人の作家 Dylan Thomas（1914-53）の「ミルクの森の下で」と Agatha Christie（1890-1976）の「Murder on Air」、それに映画監督としても有名で、今回演劇の舞台監督を初めて務めた Mike Leigh（1943-　）の「新しい芝居」などが上演されている。

Austen の代表作といえば「*Emma*（エマ）」と「高慢と偏見」である。夏目漱石が晩年 Austen の作風に共鳴して、彼のいわゆる「則天去私」の精神を盛った小説の例に「高慢と偏見」を挙げたことはつとに有名である。大学時代にアメリカ文学の飛騨知法先生の勧めで先生主宰の輪読会の一員にさせていただいた。その当時のテキストであった F. R. Leavis の *The Great Tradition*（『偉大な伝統』）も、書簡文学の第一人者であり genteel tradition（お

上品な伝統）を受け継ぐ Austen から始まっていた。[3] リーズ城で彼女の「分別と多感」が 8 月27日から 8月28日まで上演されている。

Dickens の「オリバー」は原作が *Oliver Twist* で1837年から39年にかけて執筆されたものである。1836年から37年にかけて Dickens の最高傑作と言われている *The Pickwick Papers*、1838年から39年にかけて *Nicholas Nickleby* が書かれている。国民的作家と呼ばれイギリス国民から非常に愛されている Dickens の作品である「オリバー」が上演されているのも至極当然であると言える。

Hardy の「3つの物語」は 3つの短編（「The Withered Arm」他2篇）を基に構成された舞台である。歌とカントリーダンス（2列の男女が向かい合って踊るフォークダンスの一種）から成りたっている。短編作品でも舞台で上演されることがある。

同様に、Lawrence の短編「The Rocking-Horse Winner」も10月12日に上演される。

この短編は彼の晩年の作であるが、母親のためにお金を儲けようと、競馬の勝ち馬の予想をすることに精根をすり減らして死んでゆく少年の悲劇を描いた作品である。金銭にとらわれ、ゆがめられた現代の人間（母親に代表される）への告発として、読者に訴えかけている作品なので、深刻な舞台で俳優たちがどのような演技をするのか楽しみでもある。

Orwell といえば大学時代にアメリカ人の John and Hazel Hamilton 教授夫妻から独裁国家の恐ろしさについて徹底的に教えていただいた。この「動物農場」はソビエトのスターリンの独裁政治に対する風刺的寓話小説で1945年に書かれている。もう一つの彼の代表作といえば *Nineteen Eighty-Four* で人間性を破壊する全体主義政治の恐ろしさを描いた未来小説として知られていて、1949年に書かれている。自由の国イギリスで、今もこの「動物農場」が上演されていることに、自由主義国家としての誇りと余裕が見て取れる。

Grahame の *The Wind in the Willows* は1908年に書かれている。今から約100年前の作品であり古典と言える。イギリスではクリスマスの季節によく上演されている。私が1997年から1998年にかけてイギリスに1年間滞在していた時に、Alan Bennett が演出を手掛けた公演をロンドンの West End で観劇した。舞台の役者たちが北部方言（ヨークシャー方言）丸出しの英語をしゃべっていたことを今でも鮮明に覚えている。一般に、動物を素材にして人間界を風刺した作品と言われているが、私は純粋にこの作品が大好きで、大学の英語講読の授業で 2回テキストとして使用したことがある。挿絵画家の Ernest H. Shepard の美しい挿絵が文章とマッチして、心が癒される思いで読み進んだことを昨日のことのように思い出す。Grahame 好きが高じて、Reading 近郊の静かな田舎町 Pangbourne まで出向き、Grahame が住んでいた家を訪ねた。その家を購入して暮らしていた家族と話をした後、一緒に庭で写真を撮った思い出がある。

日本では元東京大学教授の中野好夫、James Hilton の *Goodbye, Mr. Chips*（『チップス先生さようなら』）の訳者として知られている菊池重三郎、児童文学の翻訳者として有名な石井桃子（邦題『たのしい川べ』）などがこの作品を翻訳している。童話 *Winnie-the-Pooh*

(『クマのプーさん』) の筆者である A. A. Milne (1882–1956) は『たのしい川べ』の愛読者で、Grahame の許可を得て、「ヒキガエルの冒険」の章を戯曲化し、*Toad of Toad Hall* (『ヒキガエル屋敷のヒキガエル』) を1929年に出版している。「子供の時間」というラジオ番組のためにドラマ化したいという Milne からの申し出であった。それが上演された時には、Grahame 夫妻も観劇し喜んだという。しかし、原作の最も優れた部分はドラマに取り入れなかったため、古典作品を骨抜きにしたと厳しく批判した読者もいたそうである。クリスマスの季節に渡英する機会があれば是非とも観劇したい作品の一つである。

Thomas の「ミルクの森の下で」は彼の代表作である。BBC 制作のカセットテープや CD が発売されている。Roald Dahl が一度 Wales の Swansea にある彼の自宅を訪ねている。彼の家と庭に刺激を受けた Dahl は、Great Missenden の自宅の庭に自分の書斎小屋 (hut) を建てている。

Christie の「Murder on Air」も Bill Kenwright が上演している。Christie といえばミステリー小説の大家であり、1971年に Dame の称号を贈られている。Christie の小説や戯曲のファンは世界中に多く、日本でも Christie の本を一生懸命勉強して英語が上達したという人に何人も出会ったことがある。彼女の戯曲 *Mousetrap* (『ネズミ捕り』) は1952年以来の長期公演を続けていて、今年で59年目になる。「レ・ミゼラブル」が今年で26年目を迎えるが、Christie のこの長期公演の記録はおそらく破られることはないだろう。

Leigh は映画監督として日本でも有名で、*Secrets & Lies*、*Naked*、*Career Girls*、*Topsy-Turvy*、*Life Is Sweet*、*Vera Drake*、*Happy-Go-Lucky* などの映画作品がある。彼は脚本を使わず俳優たちに即興で演じさせるという独自のスタイルを貫いている。今回は舞台監督としてのデビューだが、きっと臨場感あふれる展開の「新しい芝居」を観客に提供してくれると思う。彼の映画の常連であるレスリー・マンヴィルやマリオン・ベイリーなどが出演している。ロンドンの South Bank にある National Theatre で 9月14日から10月19日まで上演予定である。Mike Leigh の映画の中で描かれている社会は、現代のイギリスを忠実に捉えていて、現実味があり目が離せない作品ばかりであるので、「新しい芝居」の上演が今から待ち遠しい。

Russell の「Blood Brothers」も Bill Kenwright によって上演される。

その他、上演されている劇を簡単に紹介する。

Oscar Wilde の *Salome* はイギリスでよく上演されているが、今回の演出方法は1932年の無声映画と生音楽を融合させた奇抜なものとなっている。

プッチーニのオペラ「蝶々夫人」も同じくイギリスでよく舞台で上演される作品である。「The Pitmen Painters」は *Billy Elliot* の脚本を手掛けた Lee Hall であるが、この劇も彼によって書かれ、Bill Kenwright によって上演されている。題名が示しているように、鉱夫と画家とは相入れないような関係であるが、鉱夫が画を習いたいという願いは誰にも否定できないものである。ちょうど *Billy Elliot* において、Billy の父親が (石炭) 鉱夫であった設定とよく似ている。イギリスの階級制度に問題提起を投げかけている作品に仕上がっているように

思われる。

「Calendar Girls」はヘレン・ミレンが主演して有名になった映画であるが、今回の舞台演出が楽しみでもある。Neil Sedaka が 1961年にヒットさせた曲名と全く同じであるが、ここではカレンダーのポスターに裸で写っている女性たちの意味である。英語に 'page three girl'（「3ページの女」）という表現があるが、イギリスの大衆紙である *The Sun* などの 3ページを開けると、裸の女性（ヌード写真のモデル）が目に飛び込んでくるのと同じである。予告のポスターに、素っ裸の 9人の（中年の）女性がピアノを囲んで、にっこりと微笑みかけていた。イギリスで制作された「Full Monty」という映画を思い出した。

「Snow White」（「白雪姫」）は「Children's Theatre on the Lawn」と銘打って、リーズ城で夏休みの 8月12日から 8月14日まで上演されている。イギリスの子供たちは両親に連れられ、幼い頃から馴染みのある童話に親しんでいるように思われる。演劇の伝統が脈々と若い世代の子供たちにも引き継がれているのである。

グリム童話の「Hansel and Gretel」（「ヘンゼルとグレーテル」）も子供たちにも馴染みのある童話であるが、このミュージカルでは聴衆がコーラスとして参加し、役者の演技を支える演出になっている。

4. イギリスの各地域で映画化されている文学作品

ここでは数ある映画化された作品の中でも 4作品のみを取り上げ、簡単な解説を加えることにする。

Wesker の劇についてはすでに述べたように、West End で「根っこ」が上演されている。1959年に、戯曲として書かれたこの作品「調理場」はチボリーというレストランの大きな調理場を描いた劇である。調理場は騒々しい場所で、そこで働く人々の人間模様が露骨に現れている作品である。戯曲では「料理人たちは、いかなる時といえども食べ物は実際に用いられてはいけない。それゆえウェイトレスたちは空の皿を運び、料理人たちはマイムで料理する」と書かれているが、映画において俳優たちがどのような言葉を発し、どのような演技をしているのか、今から楽しみでもある。上映時間は約 3時間で、10月6日にロンドンの映画館で鑑賞できる。

Mary Norton（1903-1992）は児童文学作品である *The Borrowers*（『床下の小人たち』）を1952年に書いている。この作品は日本においてスタジオ・ジブリ（映画監督　米林宏昌）によって、2010年に制作され日本で好評を博し、本家のイギリスに逆輸入されたものである。イギリスでは Arrietty（日本では「借りぐらしのアリエッティ」）という題名で、もちろん英語版（English language screening）で10月23日にロンドンで封切られる。アリエッティと人間の少年との交流を描いた物語である。監督の米林宏昌は「生きる希望を失わず、前を向いている人たちを描いた作品である」と語っている。

欧米で一番名前を知られている日本を代表する映画監督といえば、私と同世代の人たちで

あれば、黒澤明、小津安二郎、市川昆、溝口健二などの名前を思い浮かべるだろうが、欧米での知名度から言えば、現在ではスタジオ・ジブリ制作の一級のアニメ映画を、立て続けに生みだしている宮崎駿が群を抜いていると思われる。若手で才能のある映画監督が、宮崎駿の影響を多分に受けていることは否定できない。

Charlotte Brontë（1816-55）の *Jane Eyre* は1847年に書かれた作品である。Charlotte は3姉妹（Charlotte、Emily、Anne）の長女である。この作品は今までに20本を超える映画が制作されているが、この映画の目玉といえば、映画監督が日系アメリカ人の Cary Joji Fukunaga で、中世の暗い空気感にこだわった新たな物語を描いている点である。また、作中の Mrs. Fairfax 役の女優がイギリスの名優と謳われている Judi Dench である。彼女は優れた芸術の世界的な創造者たちを顕彰する「高松宮殿下記念世界文化賞」の演劇・映像部門で今年（2011年）の第23回受賞者となっている。日本にも RSC と一緒に1970年に来日し、シェイクスピアの「十二夜」と「冬物語」に出演している。76歳の Judi Dench が現在でもかくしゃくとして活躍している理由は、演劇をとおして世界にメッセージを発信していこうとする強い信念と使命感があるからだと思う。「Jane Eyre」の上映時間は約2時間で、10月24日から10月31日まで上映される。

同じく音楽部門で今年、世界文化賞を受賞した名指揮者小澤征爾にもその精神は共通しているように思われる。小澤は桐朋学園で心の師といえる齋藤秀雄から厳しく指揮法を教わっている。ちなみに、齋藤秀雄の父親は英語の辞書作りの名人と謳われた有名な齋藤秀三郎である。大学時代の恩師であった八木亀太郎先生は、齋藤秀三郎著『岩波熟語本位英和中辞典』を重宝しておられ、英文を書く時の助けになると語られていた。

最後に P. G. Wodehouse（1881-1975）の作品「By Jeeves !」について述べることにする。彼は humorist として日本でも知られている作家であるが、あまり作品は翻訳されていなかった。しかし、2005年頃から文芸春秋社や図書刊行会からいわゆる「ジーヴズもの」、*My Man Jeeves*（1919）、*The Inimitable Jeeves*（1923）、*Carry on, Jeeves*（1925）、*Very Good, Jeeves*（1930）など一連のユーモア小説が、ものすごい勢いで立て続けに今日まで翻訳刊行されている。だめな主人 Bertie Wooster と彼を支える賢い天才執事 Jeeves というコンビで、どんなトラブルでも見事に解決していくという話の展開になっている。

最初に映画化されたのは 2001年10月であるが、今回の映画の目玉は Alan Ayckbourn が 13の詞を書きかつ監督もしていることと、作曲家の Andrew Lloyd Webber がそれらのすべての詞に曲をつけていることである。世界的に有名な 2人の織りなす映画を、大人がわずか 5ポンド（約650円）、子どもが 3ポンド（約400円）で、イギリスの映画館で鑑賞できることは幸運なことである。Wodehouse は、George Orwell や Muriel Spark から高く評価された作家だけに、一連のユーモア小説をとおして、日本の一般読者がイギリスのユーモアとは何かを理解し、日本のユーモアと比較する手掛かりになればと期待している。ちなみに、元イギリス首相の Tony Blair は、イギリス P. G. Wodehouse 協会の理事をしている。この映画の

上映時間は約 2時間で11月30日にロンドンで封切られる。

イギリスの各地域で上演並びに映画化された（現在されている･される予定になっている）文学作品を列記し、簡単に説明を加えた。しかし、紹介したこれらの作品はほんの一部であり、私が訪れていない都市では、まだ多くの文学作品が上演され映画化されていることと思われる。ここに列記した作家（や作品）はイギリスの偉大な文学の伝統を支えている人たち（やもの）である。

今まで述べてきたような文学作品を、時代の風潮に流されることなく、大学での英語の授業をとおして、不易なものとして学生たちに読み継いでいく努力をすることも、日本の大学英語教育の将来を考える上で、これからの英語教師に課せられた責務であるように感じられる。

注

1. Joseph Jacobs, *English Fairy Tales*（東京 : 研究社, 1971）, 107-118.
2. Roald Dahl, *Rhyme Stew*（London : Puffin, 2008）, 7-15.
3. F. R. Leavis, *The Great Tradition*（London : Chatto & Windus, 1948）, 1-2.